様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３５３０５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００６７３

研究課題名（和文）共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査

研究課題名（英文）Continuous Research of a lot of People about the Dynamic State of Tokyo Dialect as a Base of Japanese Common Language

研究代表者
尾崎　喜光（Ozaki, Yoshimitsu）

ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：１０２０４１９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　15,210,000円

研究成果の概要（和文）：日本語には新しく生まれる表現がある一方で衰退に向かっている表現もある。そうした動態を示す日本語は東京の言葉が基盤となっている。首都の言葉でもあるため全国への影響は小さくない。
本研究では、共通語の基盤としての東京の言葉について、現在動態を示していると考えられる表現を中心に、無作為に選ばれた多人数を対象に調査することで、現在の状況および過去から現在への変化の在り方についてその一端を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、現在動態を示していると考えられるさまざまな表現に注目し、共通語の基盤でありかつ全国への影響も小さくない東京都において、無作為抽出された多人数を対象に調査することで、そうした表現の現時点での使用実態を把握するとともに、一部の調査項目については過去の調査と比較することで変化の在り方の一端を明らかにした。難度が高い調査であり、得られた知見は学術的価値が高い。
またデータは資料的価値も高く、学界および社会一般において、言葉を論じる上での確実な基礎資料としても活用できる。社会言語学、日本語学社会言語学、日本語学

研究成果の概要（英文）：While Japanese has expression produced newly, there is also expression which is going to a decline. As for Japanese which shows such a dynamic state, the language of Tokyo serves as a base. Since it is also the language of a capital, the influence on the whole country is not small.
In this research, we solved about the present situation of the language of Tokyo, and the state of the change from the past at the present. The respondents of investigation are a lot of people selected at random. An investigation items are expression considered that Tokyo shows change now.

研究分野：社会言語学、日本語学

キーワード：言語動態　言語変化　音声変化　新語・新表現　東京都　首都圏　無作為抽出多人数調査　Web調査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は1997年に、当時在籍していた国立国語研究所の研究プロジェクトの一環として、東京都在住者約1,000人を対象とする言語使用と言語意識に関する多人数調査を実施した。

東京で用いられている言葉は共通語の基盤であり、東京都在住者から無作為抽出された多人数を調査することは、共通語の現状を正確に把握する上で重要である。しかしながら、そうした調査は多額の経費と多大な労力を要することから従来ほとんど行われることがなく、当時の調査が初めてであった。

その調査から約20年経過することから、再調査を行なうことで東京の言葉の最新の状況を把握するとともに、この間の変化を明らかにする。あわせて、現在動態を示す日本語の表現や発音（たとえば動詞「言う」の諸活用形において語幹を本来の「イ」で発音するかそれとも新しい「ユ」で発音するか）についても新たに調査項目として加え、共通語の基盤である東京の言葉の現状と変化の方向性をより総合的に明らかにする。

２．研究の目的

本研究の目的は、東京の言葉の現状と変化について、多人数調査とWEB調査により明らかにすることにある。

共通語の基盤である東京の言葉について、無作為抽出された多人数を対象に複数回調査した研究はこれまでになく画期的である。調査が一回のみである場合、年齢差から変化の方向性を推定するのが一般的であるが、若年層から高年層に向けての加齢変化の可能性が排除できない。調査を複数回行なえば、変化の有無が確実に把握できる。加えて、同時期出生集団に注目して20年前と現在とを比較すれば加齢変化の有無も推定できる。「時代変化」と「加齢変化」とのからみあいを解明する研究はほとんど未開拓であり、多人数を対象とする複数回の経年調査なくしてなしえない研究である。本研究ではこうしたことの解明をめざす。

３．研究の方法

(1) コア調査

20年前との比較を主たる目的とする無作為抽出多人数面接調査。

研究代表者を中心にメンバー全員で進める。

実査は民間の調査会社に委託して実施する。

回答者は20代～60代の東京都在住者から無作為抽出する。回答者数は20年前とほぼ同規模の約1,000人とする。

調査項目と調査票は、研究代表者を中心に研究グループで検討し作成する。

音声項目については、IC レコーダを用いて回答者の発音を録音し、事後に研究代表者を中心に聴き取りを行ないデータ化する。

(2) 全国WEB調査

全国の中での東京の言葉の位置づけを解明することを主たる目的とする調査。

研究分担者の田中ゆかり・林直樹（日大チーム）が中心となり実施する。

調査はWEB調査会社に委託して行なう。回答は10,000人から得る。音声刺激を提示して回答を求める新手法も試みる。

コア調査の結果と全国 WEB 調査の結果を比較し、全国の中での東京の言葉の位置づけを明らかにする。

(3) 首都圏WEB調査

東京都を中心とする首都圏内の地域差の詳細を解明することを主たる目的とする調査。

研究分担者の三井はるみと鑓水兼貴（国語研チーム）が中心となり実施する。

首都圏の大学生を対象にすでに実施した調査と連動させ、東京都内の地域差に加え年齢差についても明らかにすべく、東京都在住の中高年層を対象に調査する。

調査はWEB調査会社に委託して行なう。回答は2,000人から得る。

(4) アーカイブ調査

過去の自然会話資料から、かつての言語使用および現在への変化を把握することを目的とする調査。

研究代表者の尾崎喜光が「放送ライブラリー」（横浜市）において実施する。

主として文末の女性語・男性語の使用に注目し、半世紀以上前に放送されたドキュメンタリー番組を調査し、発話中での出現状況を時代別に分析する。

(5) 東京語の先行研究の整理・データベース化

東京語調査の活性化を目的とする資料整備。
研究分担者の三井はるみと鑓水兼貴（国語研チーム）が中心となり実施する。
すでに作成済みの研究文献目録に調査方法・調査結果等の概要を付加して整備し、今後の無料公開をめざしての準備を行なう。

４．研究成果

上記「コア調査」の調査項目の一つに、女性語・男性語の使用がある。こうした表現が組織的に現われるのは文末である。たとえば女性語であれば、「（雨が）降るわよ」のような終助詞「わ」の付加や、「（あしたは）雨だよ」に対する「（あしたは）雨よ」のような断定の助動詞「だ」の省略が該当する。

調査では、この種のさまざまな表現を回答者に提示し、友達と話をする状況を想定させ、回答者自身使うことがあるか否かを質問した。じつは約 20 年前の 1997 年にも、調査方法は郵送による自記式アンケートであり今回の面接調査とは異なるが、全く同様の質問をした。これらを比較することにより、東京都における女性語・男性語の使用が、この約 20 年の間にどう変化したかを明らかにした。

調査結果の一例として、「（雨が）降るわよ」の女性における使用者割合（使用者率）を、2 つの調査について年齢層別に示すと図 1 のとおりである。

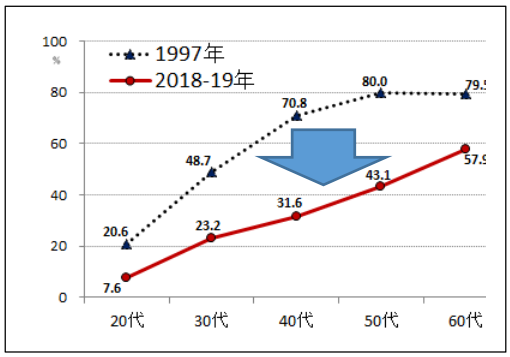

図 1 「降るわよ」の使用者率（年齢層別）

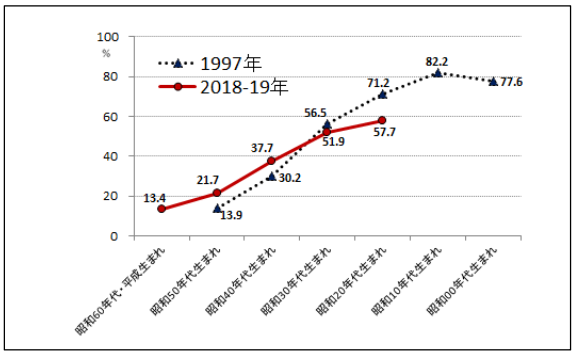

図 2 「降るわよ」の使用者率（生年層別）

これによると、1997 年調査と比べ 2018-19 調査では、どの年齢層でも「降るわよ」の使用者率が大きく減少していること、すなわちこの表現が女性の間で衰退していることが分かる。

図 2 は、回答者を生年層別（出生年別）に 2 つの調査結果を示したものである。重なりのある生年層に注目して 2 つを比較すると、この約 20 年の間に大きな変化がないことがわかる。同一個人を追跡調査したわけではないため確実なことは言いがたいが、これは、個人のレベルでは 20 年経っても変化がない（「降るわよ」をもともと使っていた女性は使い続ける一方、使わなかった女性は約 20 年経っても使わない）ということを示している可能性が高いと考えられる。すなわち図 1 に見た衰退は、東京都における構成員の入れ替え（「降るわよ」をよく使う上の世代が構成員でなくなる一方、「降るわよ」を使わない下の世代が新たに構成員として加わること）によるところが大きいと考えられる。これまでこのようなことを実証した研究はなく、本調査が初めて明らかにした点の一つである。

【参考文献】

尾崎喜光(2022)「東京都における話し言葉の男女差の時代変化とコーホート分析から推定する個人内変化」『ノートルダム清心女子大学紀要　日本語・日本文学編』第 46 巻第 1 号

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 尾崎喜光	４．巻 21
２．論文標題 「きょうの夜ごはんはコメを食べよっ！―食事に関する新表現の普及―」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『清心語文』	６．最初と最後の頁 pp.1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 林直樹	４．巻 5
２．論文標題 「アクセントの自然さにかかわる音声的特徴―首都圏生育者を対象とした聞かせる調査から―」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『方言の研究』	６．最初と最後の頁 pp.141-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 林直樹・田中ゆかり	４．巻 32(4)
２．論文標題 「多人数質問調査法の現在（7）―ネット調査の利点と制約―」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『計量国語学』	６．最初と最後の頁 pp.234-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 林直樹
２．発表標題 「同音異義語の区別にかかわる音声的特徴―下降幅・相対ピーク位置を指標としたWeb聞かせる調査結果から―」
３．学会等名 日本大学国文学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田中　ゆかり (Tanaka Yukari) (40305503)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	三井　はるみ (Mitsui Harumi) (50219672)	國學院大學・文学部・教授 (32614)	
研究分担者	林　直樹 (Hayashi Naoki) (70707869)	日本大学・経済学部・講師 (32665)	
研究分担者	鑓水　兼貴 (Yarimizu Kanetaka) (20415615)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究情報発信センター・プロジェクト非常勤研究員 (62618)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関